

中国系移住者に関する比較社会学的研究(2)

オーストラリア・メルボルンにおける第二世代調査を中心として

○山東師範大学 趙 衛国

法政大学 田嶋 淳子

1 目的

1970年代初頭に白豪主義から多文化主義への転換が図られたオーストラリアでは、1980年代以降に一連の国家レベルの言語政策が発表された。これらの言語政策によって、言語教育の在り方や方法論、学校教育現場の対応等がどのように変わっているのか、また、90年代後アジア言語重視政策の実施に伴い、社会、マイノリティ集団にどんな影響を与えているのか、これまで数多く研究されてきた(神鳥 1994、見世 1995、1998、板倉 2000、鈴木 2003、塩原 2003、谷淵 2008、青木 2008、松田 2009、川上 2012)。しかし、中国系移住者を対象にした研究が日本ではあまり見られていない。この30年来、東アジアおよび移民国家であるオーストラリア等の諸社会の変容過程に中国系移住者は大きな影響を与えている。彼らは日本、韓国において最大のエスニック・グループを形成しており、オーストラリアにおいても近年もっとも増加傾向の著しい移民グループの一つとして今後の動向が注目される(田嶋 2013)。そこで、本報告はビクトリア州メルボルン都市部にある中国語補習学校であるX中文学校を対象として、オーストラリア社会にあるマイノリティグループによる言語補習学校の変容過程と、中国系移住者第2世代の現状と意識を明らかにすることを目的とした。

2 調査方法

2012年3月と8月2回に分け、メルボルンにある中文学校に訪れ、7つの分校のうち、規模がもっとも大きい2カ所の中文学校において、次のように調査を実施した。①学校関係者(14名)に対する半構造的面接調査 ②7年生から12年生まで(13-18歳、日本の中学1年から高校3年までに相当)210人名に対し、質問紙調査を実施(回収194部、回収率92%)。

3 分析結果

X中文学校が当初の母語教育機関であるエスニック・スクールからコミュニティ・スクールへと変化していることがわかった。そのプロセスは以下のとおりである。第一段階：1992年創立した当初：生徒者数6人で、全員は大陸生まれ、母語保障教育が目的。週末授業。第二段階：1996年生徒者数1200人、大陸生まれが多いが、豪州生まれも現れた。1995年VCE教育資格が州に認定され、大学入試の点数に加算されたため、母語保障+第二言語教育が目的。週末授業。第三段階：2006年生徒者数3000人(大陸生まれと豪州生まれは半々となった、さらに、公立学校のAfter Schoolに言語サービスを提供し、母語保障+第二言語教育+LOTE教育が目的。週末授業と平日授業。質問紙調査の結果：2世代(ABC世代=Australia-born Chinese)と1.5世代(5歳以上18歳以下の学齢期に渡豪した世代)は中国語学習やオーストラリア社会への捉え方に差異がある一方、大多数の生徒たちは取捨選択可能なアイデンティティが形成されている。

4 結論

親の「母語保障」への思いは、子が移住社会における「位置取り」に効果をもつ第二言語学習(VCE)という形で母語(中国語)と文化の継承が実現されている。家族の教育戦略と第2世代の文化適応戦略とが国による言語教育政策と一致したのである。しかし、現在大学で行われている中国語教育プログラムが遅れており、大学に入った中国系第2世代の継続的かつ高度な中国語学習は困難である。今後オーストラリアの高等教育段階においてもより良い言語教育政策の進展が求められている。

付記：本報告の一部は学術振興会科学研究費(課題番号22530574(研究代表者田嶋淳子)および課題番号23330169(研究代表者グラシア・ファーラー早稲田大学アジア太平洋研究科准教授)の助成を受けた。